

アイヌの埋葬頭位モデルとその問題点

瀬川拓郎（札幌大学）

はじめに

アイヌの埋葬頭位は、冬至点と夏至点のあいだに集中し、東方向への指向性がうかがえる。これは従来、日の沈む方向にあるというアイヌの他界と結びつけて論じられてきた（藤本英夫）。すなわち、死者が立ち上がったとき、そのまま西方の他界へ歩いていけるよう、遺体の頭は東に向けるというのである。ただし真東の頭位をみせる例は少なく、北・南・西頭位など東方向を指向しないものもあり、西方他界論ですべてが説明できるわけでない。アイヌの埋葬頭位論は行き詰まりをみせているといえよう。

一方、アイヌの住居も、神聖な神の出入口である奥壁の窓が日の出の方向に向けられるとされてきた。これは日の出の方向を神聖、日の沈む方向を穢れとみなす観念にもとづいている。ただしアイヌ住居の方位も実態としては多様であり、神聖な高山に向けられていたとする聞き取りもある。これら住居方位には、聖一穢れだけでなく、他界の観念もかかわっているようである。

本報告では、アイヌの埋葬頭位について、この住居の方位の問題もからめながら、他界と穢れの視点から考察する。

1 アイヌの埋葬頭位と他界に関する聞き取り

- ・「妊娠した女が亡くなった時、穴の中に安置してから選ばれたフチが燕麦用の柄の長い鎌で、死体をくるんであるトマの上からヤッと腹に刺して、ただちに東を向く」（平取町）

北海道教委編 1988『昭和62年度アイヌ民俗文化財調査報告書』

- ・「男の墓標はオプ・クワと呼ばれ、真ん中に上に星と下に月（上弦の三日月文様）を彫り、墨を塗る。…東に向けて墓標を刺す。星と月を入れるのは、死ぬと天国に行くからだ。天国には星と月があるからだ」（静内町）

北海道教委編 1992『平成3年度アイヌ民俗文化財調査報告書』

- ・「死体は夜にガンピの松明で照らして夜に墓場へもっていき、土葬にした。…墓標を死者の頭の方、東の方に刺す」（静内町）

北海道教委編 1992『平成3年度アイヌ民俗文化財調査報告書』

- ・「東は生者のためにあり、西は死者のためにあるのです。したがって太陽が子午線より西に傾くまでは、死者を埋葬することは適切ではなく、…『死者は落日とともに西へ向かって去っていった』と考えねばならない」

N.G.マンロー2002『アイヌの信仰とその儀式』国書刊行会

- ・「他界と現世とでは、昼夜が逆になる。他界の昼の時に送ってやらないと、道に迷い、こちらへ戻るおそれがあるから、夜になって葬式を出す地方のあるのも、この考え方の現れであろう」

久保寺逸彦 1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

- ・「死者の頭の位置については、東向き（釧路・虹別、北見・斜里）、南向き（日高、沙流・ポロサル）など、地方によって違いがあり、方位についても、十勝の伏古などでは、西枕にすれば、

兎に生まれ変わるといって嫌い、変死者は、東枕でも、やや北寄りにするなどということもある」

久保寺逸彦 1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

- ・「更科源蔵氏に依れば、北見・斜里では墓穴は南北に長く掘り、掘り終えたと、木の柴で穴の縁を払い、死体は北の方に頭が向くようにして穴に入れるという」

久保寺逸彦 1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

- ・「即ち、生まれるのは『満ち潮』の時に、死ぬのは『干潮』の時という」（胆振・登別）

久保寺逸彦 1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

※他界は、日の沈む方にある世界であり、死者は落日とともに西へ向かって去っていく。死を掌るのは月である。ただし頭位は地域によって、あるいは地域内でも異なり、東や西とはかわらない。

2 アイヌの葬儀に関する聞き取り

- ・「…死穢に汚れ、まだ魔人の潜伏している恐れのある、屋内を浄め祓うことにより、禍神を遠い国の果て、日の沈む方向へ遷却しようとする…」

久保寺逸彦 1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

- ・「(大幣の神への詞) …死人の出ましたことは、…まことに私ども人の子の恥じ入る次第であります。併し今は、悪臭の物(病魔の神)も、あなたの村の、村のはずれの場所へ逐い退けてしまい、また a-okte-kamui (ひどい目にあわされて悲しんでいる火の女神)のお家の中もすっかり掃き浄め、戸外の庭のはずれ、外庭の西の果てへ掃き片づけてしまいました」

久保寺逸彦 1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

- ・「禱詞を了えたと、すぐ、寡婦を戸外へ伴い、先ず手草で身体を打ち祓ってから、涙頭巾を脱がせ、頭に被っていた着物も、着衣も脱がせて、新しい着物に着換えさせる。涙頭巾や着物は、家の前をよぎる道の向こう側、即ち西の方へ遠く運んで焼却する(沙流川筋の部落では、家は西に入口、東に神窓が向く様に建てられ、便所は家の前を通る道を隔てて、西に設けられ、入口は東向きにする。道路に西方は穢れたところであり、禍神を遷却する所と考えられている)」

久保寺逸彦 1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

- ・「(大正末か昭和初めに、釧路市の工事中に発見された墓地で唱えられた呪詛) この人間界の明るい光の輝く国の東部に、あなた方は成人して生活していられたのであったが、…今からは人間の国土の西方にあなた方はいかれて、そこにじっと落ち着いて、住んでいただきたい」

久保寺逸彦 1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

※1) 葬儀は、死者に対して絶縁を宣告するもの

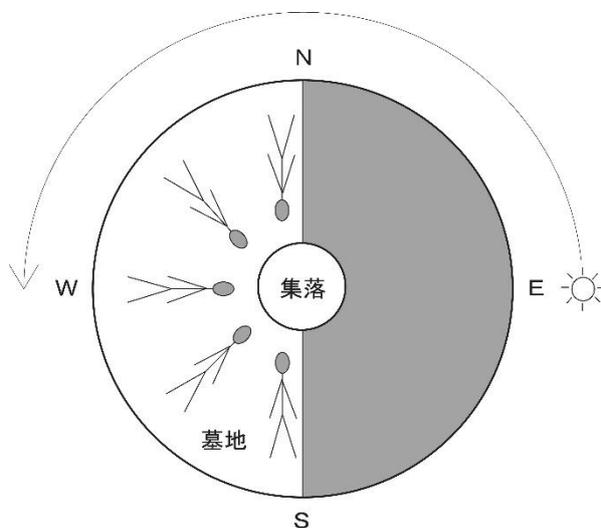
- ・ 今後は人間の言葉に耳を傾けるな
- ・ たとえ聞こえても、聞かぬふりをせよ
- ・ 今からは生者と背中あわせの仲になった
- ・ 家族のあったこと、村人のあったことなど一切忘れて、祖霊の心をもって他界へ赴け

2) 死および死の世界である西方を穢れと考えること

- ・死者を出した家、村、遺族、会葬者もすべて「垢づく (e-tur-eokka)」とみなす
- ・埋葬から帰ると手や顔を洗い、手草で身体を祓う
- ・葬儀の翌日、屋内の大掃除をおこない、西方へ掃き片づける
- ・喪服等は、部落の西の方でいっさい焼却する
- ・死者の出た家を焼き払う
- ・死を惹起した禍の神を遠い国土の果て、西の果てへ追い払う
- ・生者の世界は、東方の明るい光の輝く国 (⇔死者の世界は、西方の暗く星のまたたく国)

3 埋葬頭位の説明モデルと問題点

1) 「西—東」の世界観にもとづく埋葬頭位モデル



聞き取りによれば、死者は穢れ、忌避すべき存在であり、生者や村との関係は強く絶たれねばならなかった。墓地は死者を「遺棄」するところであり、そのため埋葬後、墓に詣でることもなかった。死者の霊魂が向かう西方も同様に、穢れ、忌避すべき方位であった。死者の霊魂が落日とともに立ち上がって西方の他界へ向かい、そのため頭位を東向きにしたのだとすれば、二度と交わってはいけない死者の霊魂が集落を通過して他界へ向かう状況、つまり墓地を集落の東側に設営する事態は避けられなければならない。地形等によっては、墓地を

集落の西側に設営することが困難な場合もあり得たであろうが、その場合でも、墓地は集落より東側に位置しないよう配慮され、霊魂の動線が万が一にも集落と交わることがないように、頭位は集落の側に向けられていたにちがいない。

実際の埋葬頭位が、東を中心に南北に大きく振れながら、西向きを避ける状況は、以上のように説明できる。

2) 問題点

- ・西を向く埋葬頭位の例が少ないとはいえ認められる。ただし死の原因によって埋葬頭位を変える場合があるので、西頭位はそのような例外的事例と理解できるかもしれない。
- ・太陽がのぼる神聖な東方向に神窓を向けるという住居方位は、埋葬頭位と同じ原理（西／死・穢れ・夜・月、東／生・神聖・昼・太陽）に基づいていると考えられるが、実際には十勝地方などで神窓が西や北を向く例がある。

4 もうひとつの方位原理

1) 聖山信仰にもとづく方位

アイヌ住居の方位について、十勝では川上に向けるという聞き取りがあり、実際、川上である西や北を向くものが多い。では、なぜ川上が神聖な方向なのかについて、渡辺仁は「彼等の重要な kamuy が彼等の住む川筋の川上に住むという信仰」に基づくという「聖山信仰」によって説明した（渡辺仁 1990「北方狩猟採集民の聖山信仰」小谷凱宣編『北方文化に関する比較研究』名古屋大学）。

アイヌ習俗にかんする多くの情報をもたらしている日高では、住居の多くは東向きであるが、川上も東であることから、住居方位が太陽方位と川上方位のいずれにもとづくのか明らかではない。千歳では、住居は恵庭岳という聖山や河川水源の支笏湖がある西（川上）ではなく、川下の東に向けられており、住居方位が聖山信仰という単一の原理によって説明できるものではないことを示している。

内山達也は、アイヌの埋葬頭位や住居方位は、各地における「東—西」と「川上—川下」という二つの原理の相関のなかで理解されなければならない、と指摘している（内山達也 2007「アイヌの方位観—神窓方位と埋葬頭位に関する一試論（平取を中心として）」『物質文化研究』4：城西国際大学物質文化研究センター）。

※アイヌの他界についてはさまざまな聞き取りがある。藤村久和によれば、アイヌの他界は海岸などの洞窟が入口で、そこから長いトンネルを抜けた先に亡くなった人びとが暮らすこの世と同じような世界がある。一定期間を経て死者は、この「準備場所」から高山の頂へ向かい、そこから天上の祖霊の世界へジャンプする、という。高山の沼を海とつながる世界とする聞き取りもあることから、この沼は他界の入口である海蝕洞窟とつながる他界の出口でもあるのだろう。

聖山を他界の出口とし、神や祖霊の世界とつながる聖域とみなす観念からすれば、住居だけでなく埋葬頭位を高山が所在する川上に向ける場合もありそうだが、実際には埋葬頭位と「川上—川下」の関連を指摘する聞き取りは寡聞である。住居方位と埋葬頭位とでは、「二つの原理の相関」が異なるものであったことも考えられる。

2) 方位原理の歴史的変遷

藤本英夫が指摘するように、縄文時代の埋葬頭位については、おおむね東頭位と西頭位がみられることから、縄文時代においても「東—西」の世界観が頭位の決定に関与していた可能性がある。ただし、死者が集落内（中央広場など）に埋葬されるといった状況からすると、死者に対する極度の恐れや穢れの意識は、縄文時代には存在していなかったとみられる。

古代の擦文文化の伝統を受け継ぐサハリンアイヌは、老人や父母をミイラにし、住居内に安置する習俗をみせており、そこには死者に対する恐れや穢れの意識を認めることができない。近世アイヌの死者に対する意識は、中世以降、おそらくは日本の影響によって生じたものだろう。

したがって、それ以前の埋葬頭位が「東—西」の世界観と結びついたものだったとしても、死者の忌避を原理とする先の埋葬頭位モデルを、古代以前にさかのぼって適用することには慎重であるべきである。方位原理の歴史的変遷の追求については、埋葬頭位だけでなく住居方位も含めて今後の課題としたい。